# 患者励まし自信につなぐ

重い先天性心疾患のある人の中には、大人になってもなかなか自立できないと悩む人もいる。さいたま市の神永陽子さん(27)も、その一人だ。

神永さんは、左心室から始まる大動脈が、通常と異なり、右心室につながるなど、生まれつき心臓病がある。幼い頃から手術を繰り返し、そのたびに幼稚園や小学校を休んだ。体の無理が利かず、体育で走る距離は半分。勉強も得意とはいえない。他の人が普通にできることが自分はできない――。自信が持てず、落ち込んだ。

普段から声は小さく、人と話すのは苦手。友達の輪にうまく入れず、小中学校でいじめに遭い、中学2年の時、うつ病を発症した。治療を受けながら、学校の勉強をした。

高校では仲の良い友達ができた。しかし、体育の授業を続けられず、2年の時に中退した。その後、通信制高校で学んだ。発達障害があり、今は就労支援の事業所に通い、クッキーを焼いて袋詰めにする作業をしている。

「同じ年頃の子は結婚したり、子育てをしたりしている。自分も次のステップを踏み出さなければ」

今夏、図書館で働くための資格を取ろうと、大学の短期講座に通った。「読書が好きで、本に囲まれていると幸せ。家族に迷惑をかけずに生活できるようになりたい」と意気込む。

図書館で働くため、資格取得の勉強に励む神永さん

2、3か月に1回、小児科や精神科が専門の「クリニックおおた」(横浜市)を受診する。院長の太田真弓さんに人づきあいの悩みなどを相談する。神永さんは「言葉のかけ方などを助言してもらい、どのようにコミュニケーションを取ればいいのか、少しずつ分かってきました」と話す。

太田さんは「生まれつきの心臓病が性格に影響を及ぼし、心の問題につながる場合があります」と指摘する。体を動かすことが制限されるなどして、「ほかの人と対等ではない」と劣等感を抱くことがある。治療が長引くと親への依存度が高くなり、自立できないままの患者も少なくないという。

先天性心疾患の大人の患者を診る時は、近況など話をじっくりと聞く。自信がないと漏らす患者には「得意なこともあるじゃない」などと励ます。

太田さんは「心臓病があっても、秀でた部分がある人はたくさんいます。できないことを病気のせいにせず、できることは自分でやる。周囲の人も、何かできた時はしっかり認めてあげることが、自信を持てるようになることにつながります」と説明する。

(利根川昌紀)

(次は「不妊治療の後に」です)